



企画にあたって

泉 知里

(国立循環器病研究センター心臓血管内科部門心不全科部長)

弁膜症に対するインターベンション治療の導入と普及、従来弁置換術の適応であった症例に対する自己弁を温存した術式の進歩など、弁膜症治療はいま最もホットな領域となっています。

高齢化社会をむかえ、大動脈弁狭窄症や、左室機能低下を伴った機能性僧帽弁逆流の患者さんはどんどん増え、そのような状況で治療選択が広がるなか、外科医・内科医・麻酔科医・コメディカルなどハートチームで治療方針を決定していくことが必要となってきました。

また、駆出率の保たれた低流量低圧較差重症大動脈弁狭窄症、心房細動にみられる心房性僧帽弁逆流、非リウマチ性僧帽弁狭窄症、Barlow 病における Mitral annular disjunction など、古くから知られている疾患のなかから新しい概念が提唱されたり、従来の知見が見直されたりしています。その機序、評価法、予後との関連、治療時期や術式に関して議論がなされており、興味深いトピックスが多くみられます。

いま一度、評価におけるピットフォールや、手術適応の考え方、各症例における特殊性などを見直す必要があります。それらをふまえ、臨床の場で最近気になるトピックス、従来から語りつくされているけれどやっぱり気になるトピックスを選びました。今までよく知られている弁膜症を、さらに掘り下げる内容になったのではないかと考えています。

これらのトピックスをじっくり読んでいただき、弁膜症診療の現場で活かしていただければと願っています。